

Vimalamitra の *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don*

——その特徴と問題について——

赤羽 律

0 はじめに

本稿で採り上げる Vimalamitra については、チベットに種々の伝承が存在するが、ある伝承によると、彼はチソンデツェン王の崩御の前後にチベットに入蔵し、十三年チベットに留まったという。また、その後中国へ行ったとも伝えられている。それらの伝承が真実であるかどうかは定かではないが、いずれにせよ彼は密教関係の論書を中心に多くの著作を残し、特にニンマ派において有名かつ重要な人物の一人として知られている。そのため、彼について何らかの言及をしている先行研究は数多く見いだされる。しかし、彼自身を中心に扱った本格的な研究というのは筆者が知る限り存在せず、依然として不明な点が多い人物であることも事実である⁽¹⁾。

数多く残された Vimalamitra の著作のうち、本稿で取り上げる *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don* (以後 *Rim gyis*) という論書は、*Cig car 'jug pa rnam par mi rtog pa'i bsgom don* (以後 *Cig car*) という彼のもう一つの論書と常に一對のものとして扱われてきた⁽²⁾。このうち、*Cig car* については、その後半部分と相応する文献が敦煌文献 Pelliot tib. no.116 に見出されることから、内外の研究者の興味を集め、直接的にせよ間接的にせよこれまでに数多くの研究が行われている⁽³⁾。しかしその一方で、本稿で採り上げる *Rim gyis* に関してはほとんど研究が行われていないというのが実情である。その主な原因は、上述の *Cig car* 研究の過程で *Cig car* が Vimalamitra の真作でない可能性が高いという結論が導かれたためであろう。例えば、Faber 氏は、Vimalamitra 二人説の妥当性に関する考察を行った論文の中で、*Cig car* が Vimalamitra の真作ではないという結論に基づき、*Rim gyis* が *Cig car* と一對の論書であり、*Cig car* が Vimalamitra の真作でない以上、*Rim gyis* も彼の真作であると考えない方が妥当であるとしている (Faber 1989, 24)。

しかし、「*Rim gyis* は Vimalamitra の真作ではない」という Faber 氏の結論は、*Rim gyis* の内容を吟味し考察した上で導き出されたものではなく、十分説得力のあるものとは言い難い。それ故に、本稿においてはまず Vimalamitra の *Rim gyis* の構成とその特徴を明らかにし、その後 *Rim gyis* が Vimalamitra の真作であるのかどうかを吟味したい。またその結果に基づいて、*Cig car* が Vimalamitra の真作か否かという問題についても Pelliot tib. no. 116 との関係とは別の観点から若干ではあるが言及したい。

1 Rim gyis の構成と特徴

最初に Rim gyis の構成を確認する。Rim gyis の構成に関して具体的に言及した研究は存在しないが、Faber 氏が Rim gyis と Cig car を一対のものとみなしたように、Rim gyis の構成が Cig car のそれと非常に類似していることは Cig car の研究者達には知られていたように思われる。そこでまず Cig car の構成について簡単に確認しておきたい。既に原田氏によって指摘されているように、Cig car の前半部分では止・観について述べられており、この部分は Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* (BhK) の止・観に関する記述と対応している。一方、後半部分は漸門派からと思われる幾つかの反論が提示され、それを論破するために経典や論書が多数引用されており、この部分が敦煌文献の Pelliot tib. no.116 と対応関係にある（原田 1976）。さらに、原田氏は同論文において、この Cig car の後半部分と Pelliot tib. no.116 の関係を考察し、そこに引用された経典の相違や内容の精度などから、Cig car の後半部分の成立が Pelliot tib. no.116 よりも後である可能性を指摘している。即ち、少なくとも Cig car の後半部分は Vimalamitra の生存時代よりも後に作られたものであり、後代の挿入であると考えているのである⁽⁴⁾。

一方で、Rim gyis も Cig car とほぼ同様の構成を保持している。即ち、Rim gyis の前半部分には BhK において説かれた止・観に関する記述からの多くの引用が見出される。また、後半部分は敦煌文献との関係は不明であるが、Cig car とは逆に頓門派からと思われる四種の反論が提示され、それを論破するための経典引用が続く。このように Rim gyis は論述の意図という点では Cig car と反対の論書ではあるが、構成自体については Cig car とよく似ている。しかし、今回 Rim gyis の構成をさらに詳しく考察した結果、この前半部分が BhK の中でも特に BhK II に説かれた止・観の記述からの引用を中心としており、後半部分において頓門派の反論を論破するために引用された経典群の多くは Śāntideva の *Śikṣasamuccaya* (ŚS) の第 11 章（禅定章）に引用される一連の経典群の引用であることが判明した。その概要を表にして示すならば次の表の通りである。

< BhK・Rim gyis・ŚS の対応箇所比較表 >

no.	Rim gyis	BhK
0	D. 340b7–341a2, P. 397b6–398a3	lacked
1	D. 341a3–4, P. 398a3–4	*II 1.22–3.3
2	D. 341b3–4, P. 398b4–5	III 1.9–13, D. 56a1–3
3	D. 341b4–342b4, P. 398b6–400a1	II 13.19–21.12
4	D. 342b4–343a1, P. 400a1–6	*I 215.7–216, tib.265.4–266.16
5	D. 343a1–2, P. 400a6–8	lacked
6	D. 343a2–4, P. 400a8–b2	II 11.16–23
7	D. 343a4–5, P. 400b2–3	I 193.7–9, tib.237.28–238.3
8	D. 343a5–6, P. 400b3–5	II 11.23–13.4
9	D. 343a6–b1, P. 400b5–8	lacked

—Vimalamitra の *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don*—

10	D. 343b1-4, P. 400b8-401a5	II 13.5-18
11	D. 343b5-6, P. 401a5-7	*I 192.7-17, tib.237.4-14
12	D. 343b6-344a1, P. 401a7-b2	I 190.23-191.9, tib.235.9-21
13	D. 344a1-4, P. 401b2-7	I 191.12-22, tib.235.25-236.16
14	D. 344a4-5, P. 401b7	lacked
15	D. 344a5-345a5, P. 401b7-403a5	II 21.10-27.4
16	D. 345a6-b5, P. 403a5-b5	II 27.7-29.8
17	D. 345b5-6, P. 403b5-7	II 29.9-13
18	D. 345b6-346a7, P. 403b7-404b1	III 1.15-31.1, D. 56a3-b6
19	D. 346a7-b2, P. 404b1-4	III 4.12-18, D. 57a3-5
20	D. 346b2-3, P. 404b4-6	II 33.3-9
21	D. 346b3-5, P. 404b6-405a1	III 5.1-10, D. 57a5-b1
22	D. 346b5-6, P. 405a1-2	II 33.12-14
23	D. 346b6-347a2, P. 405a2-5	lacked (*BhK II 33.12-17, *BhK III 9.7-11, D. 59a5-6)
24	D. 347a2, P. 405a5-6	*II 35.8-11
25	D. 347a2, P. 405a6	*II 35.5-7
26	D. 347a2-3, P. 405a6-7	*II 37.2-4
27	D. 347a3-b2, P. 405a7-b7	II 37.5-39.5
28	D. 347b2-3, P. 405b7-8	III 6.12-14, D. 58a3-4
29	D. 347b3-4, P. 405b8-406a2	II 39.6-7
30	D. 347b4-5, P. 406a2	I 203.11, tib.250.21-22
31	D. 347b5-6, P. 406a2-4	I 210.9-12, tib.259. 3-10
32	D. 347b6-348a5, P. 406a4-b4	lacked
33	D. 348a5-b1, P. 406b4-8	II 39.19-43.5
34	D. 348b1-3, P. 406b8-407a3	II 45.20-47.3
35	D. 348b3-349b2, P. 407a3-408a5	lacked
36	D. 349b2-3, P. 408a5-7	II 47.20-25
37	D. 349b4, P. 408a7-b1	lacked
38	D. 349b4-351a5, P. 408b1-410a5	III 9.13-12.5, D. 59a7-60b3
39	D. 351a5-6, P. 410a5-6	II 55.10-13
40	D. 351a6-352a2, P. 410a6-411a5	III 12.5-13.14, D. 60b3-61b1
41	D. 352a2-353b6, P. 411a5-413b3	lacked
	Rim gyis	ŚŚ (chapter 11)
42	D. 353b6-354a3, P. 413b3-b7	D. 108b2-b6, Skt.107.1-14
43	D. 354a3-b4, P. 413b7-414b5	D. 109a3-b5, Skt.107.27-108.26
44	D. 354b4-5, P. 414b5-6	D. 109b5-6, Skt.108.29-30
45	D. 354b5-6, P. 414b6	lacked
46	D. 354b6-7, P. 414b6-415a1	D. 109b6-110a1, Skt.108.30-109.2
47	D. 354b7-355a1, P. 415a1-2	lacked
48	D. 355a1-b3, P. 415a2-b7	D. 110b1-111a5, Skt.109.20-110.3
49	D. 355b3-4, P. 415b7-8	lacked
50	D. 355b4-356a5, P. 415b8-416b4	D. 111a5-b6, Skt.110.3-9

51	D. 356a5, P. 416b4	lacked
52	D. 356a5-7, P. 416b4-7	D. 111b6-112a1, Skt.110.9-12
53	D. 356a7-357a2, P. 416b7-417b3	D. 112a4-b5, Skt.110.17-33
54	D. 357a2, P. 417b3	lacked
55	D. 357a2-4, P. 417b3-6	D. 110a1-3, Skt.109.3-7
56	D. 357a4-b1, P. 417b6-418a4	D. 110a4-b1, Skt.109.9-19
57	D. 357b1-358a1, P. 418a4-b6	D. 112b5-113a4, Skt.111.1-14
58	D. 358a1-3, P. 418b6-419a2	D. 113a5-7, Skt.111.19-22

(注) *印の箇所は逐語的には一致しないが、内容が一致する箇所。

また、no.1 と no.2 の間の部分は lacked に相当する。

この表によって、*Rim gyis* の前半部分は BhK からの引用が多数を占めており、後半部分には、ŚS の第 11 章に引用されている経典が引用されていることが確認できる。また、上表において lacked として示した部分は、そのどちらからの引用でもない部分である。それらは直前の内容の簡単な要約であることが多いが、中には要約を超えた記述や経典引用の場合も存在する。尤も、*Rim gyis* の多くの部分が BhK と ŚS からの引用であることを考慮するなら、これら二つの論書からの引用ではない部分も、実際には別の論書からの引用である可能性も否定しきれない。しかし、現段階ではそれらの部分と一致する文献を筆者は見出せていない。それ故に、本稿では少なくともこれらの部分については Vimalamitra 自身の独自の見解が示された部分であると想定しておく。この様に、大半の部分を BhK と ŚS からの引用で占められている *Rim gyis* には、Vimalamitra の独自思想というものを多く期待することは不可能であるかもしれない。しかし、さらに内容を吟味するなら、*Rim gyis* については以下に挙げるような数点の特徴を指摘することが出来るであろう。

<特徴 1> *Rim gyis* の前半部分は BhK 三篇何れからの引用も見出されるが、基本的には、BhK II の止・観について述べる部分をほぼ BhK II に説かれた順序に従って引用していると考えられる。ただし、上表の no.3 の部分のみが例外的に BhK II に説かれた順序と錯誤している。しかし同時に BhK II の記述を引用せずに、BhK I や BhK III の記述を引用している箇所があるということも事実である。もっとも、これらの部分も注意深く考察するならば、多くの場合、その内容とほぼ同じ内容の記述を BhK II にも見出すことが出来、それらの部分については、BhK I や BhK III の記述の方が BhK II より具体的なことが多いという傾向が見出される。つまり、*Rim gyis* においては止・観の記述を BhK II からの引用に負いながらも、より詳しい記述が他の二篇の中に見出される場合には、それらの記述を採用していると考えられるのである。その点を具体的に表している例は幾つも見出されるが紙幅の関係もあり一例のみを以下に例示する。

(no.24-no.29) chos la bdag med pa yang 'di ltar bsgom par bya ste / chos zhes pa ni mdor bsdu na phung po lnga dang / skye mched bcu gnyis dang / khams bco brgyad do // de la phung po dang / skye mched dang / khams gzugs can gang yin pa de dag ni don dam par na sems kyi

nram pa las gud na med de / de dag rdul phra rab tu bshig la / rdul phra rab rnams kyang cha
shas kyi ngo bo nyid so sor brtags na ngo bo nyid nges par gzung du med pa'i phyir ro // de
skad du 'phags pa Lang kar gshegs pa las kyang bka' stsal te /
 rdzas ni rdul du rnam gzhig cing //
 gzugs la rnam par ma rtog cig //
 sems tsam rnam par gzhaq pa ni //
 lta ba ngan pa mi rtogs so // zhes 'byung ngo //
 de lta bas na thog ma med pa'i dus nas gzugs la yang dag pa ma yin pa la mngon par zhen pa'i
dbang gis rmi lam na dmigs pa'i gzugs la sogs pa snang ba bzhin du byis pa rnams la sems
nyid gzugs la sogs par phyi rol du chad pa bzhin du snang gi don dam par na 'di la gzugs la
sogs pa ni sems kyi rnam pa las gud na med do zhes dpyad par bya'o // (下線・イタリック
 は筆者)

この引用部分の全体は、既に挙げた表における Rim gyis の no.24 から no.29 に相当する部分である。そのうち下線部分は BhK II と一致する部分であり、イタリック部分は BhK III とほぼ一致する部分である。一見して分かるように、全体を通して BhK II の記述と一致しているにもかかわらず、途中で引用される『楞伽經』(Lankāvatārasūtra / Lang kar gshegs pa) については BhK II に見出すことが出来ない。しかし、この『楞伽經』の引用箇所を含む前後はほぼそのまま BhK III の記述と一致するのである。つまり、同箇所に関しては、BhK III の方が『楞伽經』を引用し BhK II より若干詳しい説明を行っているのである。それ故に、Rim gyis ではこの部分に関して BhK II の記述に BhK III の記述を補って引用していると考えられるのである。同様の例は Rim gyis にはしばしば見出される。この他にも、no.38 や no.40 は比較的長い BhK III からの引用となっているが、同内容の簡単な記述そのものは BhK II にも見出されるのである。ただ、BhK III の方がより詳しい記述となっているために、BhK II ではなく BhK III の記述を引用していると考えられるのである。

<特徴 2> Rim gyis の前半部分は基本的に BhK 三篇からの引用で成り立っているが、既に挙げた表で指摘したように、引用ではない Vimalamitra 独自の見解が述べられる箇所が存在する。そして、Rim gyis の前半部分は BhK 三篇からの引用が中心となっているために、この Vimalamitra 独自の記述部分が、実質的には BhK 三篇の注釈になっているのである。一例として上表の no.36 と no.37 に相当する部分を挙げる。

(no.36 & no.37) de ltar chos su btags pa mtha' dag med pa kho na la zhugs pa de / yongs su
brtag par bya ba gzhan med pas rtog pa dang dpyod pa dang bral ba brjod pa med pa / ngang
gcig tu 'gyur ba'i yid la byed pa rang gi ngang gis 'jug pa mngon par 'du byed pa med pas de
kho na nyid la shin tu gsal bar bsgom zhing 'dug par bya'o // de ltar gnas nas sems kyi rgyud
rnam par mi g-yeng bar bya'o // de ltar gyur na spros pa rnam par mi rtog pa nyid la zhugs pa
yin no // gzugs la sogs pa yang mi gnas pa yin no // shes rab kyis brtags na dngos po mtha' dag

gi ngo bo nyid ma dmigs pa'i phyir shes rab mchog gi bsam gtan pa yang yin no //

下線部分は BhK II と一致する記述 (no.36) であり、その後に続く部分 (no.37) が BhK には見出されない記述なのである。この部分はその直前の内容を「そうであるなら」と説明しており、実質的には BhK II の内容を注釈していることになる。このような例は上表において BhK の記述と一致するとした多くの部分においても、若干の言葉の補いが存在するなど、数多く見出される⁽⁵⁾。

<特徴 3> Cig car と Rim gyis のチベット大蔵経における収録箇所については奇妙な点が存在する。つまり、これら両論書は、その意図こそ正反対であるものの、同一作者による「止・観修習」を扱った同一系統の論書である。それにも拘わらず、収録されている箇所が離れているのである。本来、同一作者による同一系統の論書であれば並んで配置されるのが普通の様にも思われるが、実際にはそうなのではない。この点については、これまで特に注目されることがなかったが、既に上で確認したように Rim gyis の後半部分が SS の引用を中心に成り立っているという事実が、大蔵経中に収録された Rim gyis の位置にも影響を及ぼしていると考えられる。つまり、Rim gyis が収録されているのは、Cig car や BhK 三篇など修習関係の論書が収録されている場所とは離れ、ちょうど SS の直前なのである。これは Rim gyis の後半部分が SS からの引用であることが考慮された結果であるとも考えられる。

<特徴 4> Rim gyis は大きく分ければ BhK からの引用部分からなる前半部分と SS からの引用部分からなる後半部分の二つに分けられるが、厳密にはその間に、そのどちらからの引用でもない經典引用を含む記述が見出される。これが no.41 に相当する部分である。BhK や SS の引用部分からなる箇所については、BhK や SS に関する多くの先行研究に譲り、本稿ではこの no.41 に相応する部分についてのみ若干の説明をしておく。この部分には頓門派からと思われる四種の反論が挙げられ、Vimalamitra がそれに対して經典を引用して論駁しているのである。各反論とそれに対する答論で引用される經典の概要は次の通りである。

- (第1反論) 『宝蔵経』に「この經典を聞くことと、見ることと、従うことのみによって、菩提を得る」と説示されており、深甚なる法を聞くことによって菩提を得ることが出来るから修習は必要ない。(答論) それは、令入秘密の一つではあるが真実義ではないから、一切知を得ることではない。『華嚴経』を根拠として引用する。
- (第2反論) 布施をなすことと、三宝に帰依することによって菩提を得るのであるから、閑所に留まって修習する必要はない。(答論) 閑所に留まらず、修習せずに一切知者性を得ることではない。『慈氏大獅子吼経』『四種法経』『大宝積経迦葉品』『文殊師利佛土功德莊嚴経』を根拠として引用する。
- (第3反論) 書写・読誦することで、業と煩惱の全てが清浄になることから、理の如く精神集中すべき必要はない。(答論) 書写・読誦の意味は小さい。『大宝積経迦葉品』を根拠として引用する。

- (第4反論) 在家にて菩提を得ることから、閑所に住し、止と観を修習する必要はない。
(答論) ŚS の第11章の經典引用 (no.42–no.58)。

興味深いのは、この頓門派からと思われる反論が始まる直前 no.40 は BhK III からの引用であるが、BhK III においてもこの no.40 と一致する記述の直後から、頓門派からの反論とそれに対する Kamalaśīla による答論が始まり、両論書の構成は一致している。

＜特徴5＞ Rim gyis の後半部分ŚS 第11章の引用經典と一致する点についても若干の説明を加えておく必要がある。基本的にはここで列挙されている諸經典もŚS に引用されている順番通りに引用されているが、no.55 と no.56 に関しては実際のŚS の引用順序から逸脱している。また、ŚS の引用通りに引用されている場合でも、その一部が欠落している場合が見出される。これが Vimalamitra の意図的な取捨選択によるものであるのか、単なる筆写ミスによるものであるのか、或いは、大蔵經中に存在するのとは別のŚS の写本が存在し、それに依拠したものであるのかは現段階では確定できない。また、各引用教典の間に引用ではない記述が挿入されているが、これら全ては直前の引用部分の内容を簡潔に要約するための、或いは、続く引用經典を導入するための短い記述であり、Vimalamitra 自身による記述であると考えられる。

2 Rim gyis の真偽について

次に Rim gyis が Vimalamitra の真作か否かについて考察する。Rim gyis が Vimalamitra の真作であることを確認するには、Vimalamitra の他の著作中に Rim gyis と一致する記述を見出すことが出来ればよい。しかし、チベットにおいて Vimalamitra は特に密教論者として有名であり、彼の著作の中で最も多いのは密教関係の論書である。それ故に、非密教文献である Rim gyis と一致する内容をそれらの中に求めるのは難しいように思われる。そこで本稿においては、Vimalamitra の著作の中から密教以外の著作を採りあげ、その確認を試みた。それは以下の二つである。

- 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa bdun brgya pa'i rgya cher 'grel pa (SPT)⁽⁶⁾
- 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i rgya cher bshad pa (PHT)⁽⁷⁾

この二つの注釈書は、824年に作られたとされる『lHan dkar ma (lDan dkar ma) 目録』の中に Vimalamitra 作としてその名前が記載されており⁽⁸⁾、伝承上知られている Vimalamitra のチベットでの活躍時期 (Khri srong lde btsan 王の崩御の前後に入蔵してから13年間) ととも一致することから、Vimalamitra の真の著作と考えて問題ないであろう⁽⁹⁾。それ故に、もし Vimalamitra の真作と考えられるこれら二つの注釈書の中に Rim gyis の内容と一致する記述を見出すことが出来れば、Rim gyis もまた Vimalamitra の真作と考えて問題ないと言えるであろう。このうちまず PHT から確認をはじめたところ、Rim gyis において BhK との一致点が見出されず Vimalamitra 自身の説が説かれている no.35 の前半部分において引用されてい

る一連の経典・論書が、PHT においても同じ順序でほぼそのまま引用されていることが判明した。それは以下の通りである。

Rim gyis (no.35 前半部分)	PHT P. 292b4 – 293a5
de bas na yul dang yul can la sogs pa'i dngos po nams ni smig rgyu'i chu la sogs pa bzhin du rang gi ngo (P. 407a4) bos stong pa yin no // (D. 348b4) de dag la yang de dang de dag la brten nas 'byung ba zhes rtog pa gang yin pa de ni kun rdzob yin no // de nyid kyi phyir 'phags pa Lang kar gshegs pa las / dn- gos po skye ba kun (P. 407a5) rdzob tu // dam pa'i don du rang bzhin med // ces gsungs so // 'phags pa rGya cher rol pa las kyang / shākya'i sras pos rten cing (D. 348b5) 'brel 'byung chos // rang bzhin ngo bo nyid med mthong nas ni // (P. 407a6) nam mkha' lta bu'i sems dang rab ldan pa // g-yon can dpung bcas mthong bas g-yo ba med // ces 'byung ba dang / Kon mchog ta la la las kyang / rkyen las skyes pa'i rang gi dngos ma (D. 348b6) skyes // (P. 407a7) chos kyi lus ni rgyal ba rnam kyi sku // mchog nyid rtag tu gnas pa nam mkha' bzhin // bstan na chos rnam sbyor ba 'thob par 'gyur // zhes 'byung ba dang / Sangs rgyas thams cad kyi yul la (P. 407a8) 'jug pa ye shes snang ba'i rgyan las kyang / chos thams cad (D. 348b7) kyi rang bzhin thob pa ni cung zad kyang spros par mi byed do // de ci'i phyir zhe na / rgyu dang rkyen gyis bskyed pa'i phyir ro // gang rgyu dang rkyen (P. 407b1) gyis bskyed pa de ni shin tu ma skyes pa'o zhes 'byung ba dang / 'phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas kyang / rten cing 'brel par gang (D. 349a1) 'byung ba // rang bzhin gyis ni de ma skyes // rang bzhin gyis ni gang ma skyes // (P. 407b2) de la skyes zhes ji skad bya // shin tu phra ba'i dngos la yang // gang gis skyes par rnam brtags pa // rnam par mi mkhas de yis ni // rkyen las byung ba'i don ma (D. 349a2) mthong //	de bas na gzugs la sogs pa'i snang ba gang yin pa de dag smig rgyu'i chu la sogs pa bzhin tu rang gi ngo bo stong ba yin no // de dag la yang de dang de la brten nas 'byung ba zhes rtog pa gang yin pa de ni kun rdzob yin no // de nyid kyi phyir bcom ldan 'das kyi 'phags pa rGya cher rol pa las / shakya'i sras po rten cing 'brel par 'byung ba'i chos // rang gi ngo bo med par mthong nas ni // nam mkha' lta bu'i sems dang rab ldan pas // g-yon can dpung bcas mthong bas g-yo ba med ces 'byung ba dang / dKon mchog ta la la las kyang / rkyen las skyes pa rang gi dngos ma skyes // chos kyi lus ni rgyal ba rnam kyi sku // chos nyid rtag tu gnas pa nam mkha' bzhin // bstan na chos rnam spyod ba thob par 'gyur zhes gsungs so // Sangs rgyas thams cad kyi yul la 'jug pa ye shes snang ba'i rgyan las kyang/ chos kyi rang bzhin las g-yo ba med do // chos kyi rang bzhin las ma g-yos pa ni chos kyi rang bzhin thob par 'gyur ro // chos kyi rang bzhin thob pa ni cung zad kyang spros par mi byed do // de ci'i phyir zhe na / rgyu dang rkyen gyis bskyed pa'i phyir ro // gang rgyu dang rkyen gyis bskyed pa de ni shin tu ma skyes pa'o // gang shin tu ma skyes pa de ni des bar thob pa yin no // gang nges par thob pa de ni chos thams cad ying la byed par dang lhan cig gnas byed pa ma yin no zhes 'byung ba la sogs pa gsungs pa yin no // de nyid kyi phyir 'phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas kyang / rten cing 'brel par gang 'byung ba // rang bzhin gyis ni de ma skyes // rang bzhin gyis ni gang ma skyes // de la skye zhes ji skad bya // shin tu phra ba'i dngos la yang // gang gis skye bar rnam brtags pa // rnam par mi mkhas pa de yis ni // rkyen las byung ba'i don ma mthong zhes gsungs so //

上表に示したとおり、*Rim gyis* に『楞伽經』の引用が加えられている点、及び PHT に引用されている經典の一部が *Rim gyis* において省略されている点など若干の相違は存在するものの、基本的に同じ經典・論書の同じ箇所が同じ順番で引用されていることは明らかである。このように、*Rim gyis* において Vimalamitra の独自性が現れていると推察される箇所の經典引用と、Vimalamitra の真作と考えられる PHT におけるそれとはほぼ一致していることが分かるのである。さらに、学会発表においても指摘したように、Vimalamitra がここで「聖 Nāgārjuna 足下によつても」(‘phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas kyang) として引用する二偈は、順番に Nāgārjuna の *Yuktiṣaṣṭikā* (YS) の第 19 偈と第 12 偈であり、この二偈がこの順番で連続して引用される例は、私が本稿の執筆にあたり調べた限りにおいて Vimalamitra の *Rim gyis* と PHT 以前の論書には見つけることが出来なかった⁽¹⁰⁾。それ故に、これらは Vimalamitra に特徴的なものであるということが可能であろう。この事実に基づく限り、*Rim gyis* は Vimalamitra の真作である可能性が高い⁽¹¹⁾。

3 Cig car の真偽について

Rim gyis が Vimalamitra の真作である可能性が高いというこの事実に基づくならば、*Rim gyis* と同様の構成内容を有する *Cig car* も又、Vimalamitra の真作であるという仮説が成立するかもしれない。しかし構成こそ似ているものの、真作と考えられる *Rim gyis* と全体として正反対の内容を説いていることを考慮に入れるなら、*Cig car* はすでに先行研究で指摘されているように Vimalamitra の真作ではないと思われる。さらには *Rim gyis* や Vimalamitra の他の著作に何らかの改ざんが加えられ、頓門派に都合のよい内容に作り変えられた作品である可能性さえ疑われる。それを指すものとして、*Cig car* のタイトルの問題が挙げられる。実は、*Cig car* のタイトルはテキストの直前に次のように挙げられている。

Mi rtog pa'i bsgom don Bi ma la mi tras mdzad pa'o // Cig car 'jug pa nram par mi rtog pa'i bsgom don /⁽¹²⁾

これを見ても分かるように、現在 *Cig car* として知られている論書は、元々は『無分別修習義』(*Mi rtog pa'i bsgom don*) というタイトルの論書であり、一般に知られている *Cig car* のタイトル中の「頓悟」(*Cig car 'jug pa*) が欠落したものであったと考える方が妥当ではないだろうか⁽¹³⁾。実際、*Cig car* の最初で目的を述べる箇所においても、「頓悟」を意味する言葉は使われておらず、ただ「無分別禪定を修習すべきである」と述べるのみである⁽¹⁴⁾。

そもそも *Cig car 'jug pa nram par mi rtog pa'i bsgom don* というタイトルは不自然な感を否めない。即ち、内容に基づくならば、*Cig car* のタイトルは、*Cig car 'jug pa nram par mi rtog pa'i bsgom don* ではなく、*cig car 'jug pa* と *nram par mi rtog* が入れ替わった *rNam par mi rtog pa la cig car 'jug pa'i bsgom don* であるべきではないか。例えば、Kamalśīla も注釈を書いている『入無分別陀羅尼』のタイトルは、*rNam par mi rtog par 'jug pa'i gzungs*

(*Avikalpapraveśadhāraṇī*) であり、'Jug pa rnam par mi rtog pa'i gzungs ではないのである。さらに、以下に示すように、Cig car の終末偈の a 句には、mi rtog cig car 'jug pa と書かれており、cig car 'jug pa と rnam par mi rtog pa が入れ替わっているのである。

mi rtog cig car 'jug pa 'di bshad pas //

khams gsum sems can mtha' yas ji snyed kun //

shes rab mig thob dbu ma'i don rtogs nas //

thams cad mkhyen pa myur du thob par shog / (Cig car, D. 13b3)

この様に、Cig car 'jug pa rnam par mi rtog pa'i bsgom don という論書は、本来「頓悟」(Cig car 'jug pa) という言葉を欠いたタイトルの論書であった可能性が高い。あくまでも推論の域を出ないが、それが Cig car に後半部分 (Pelliot tib. no.116 との類似部分) が付け加えられるなどして頓門派に都合のよい内容に改ざんされた際に、後で「頓悟」という言葉が付加されたと考えることも十分可能であろう⁽¹⁵⁾。

さらに、Rim gyis において BhK や SS からの引用ではなく、Vimalamitra 独自の見解だと思われる箇所について、同様の記述が Cig car にも見出される点 (例えば、本稿の<特徴 2.>に挙げた Rim gyis に固有な部分は Cig car にもそっくりそのまま見出される (Cig car, D. 8b7-9a2)) などを考慮するならば、Cig car が Rim gyis に依拠して何らかの改ざんが行われた作品であるとも考えることも可能ではないだろうか。

最後に、もう一点興味深い事実を指摘して本稿を終わりとしたい。即ち、Cig car と Rim gyis という二つの論書の名前は『lHan dkar ma 目録』に見出されない。それだけでなく、dBus pa blo gsal のテンギュール目録と Bu ston chos 'byung の目録にもその名前は存在しないのである。しかし Bu ston のもう一つテンギュール目録と sGra tshad pa のテンギュール目録には存在するのである⁽¹⁶⁾。

4 まとめ

本稿においては、Rim gyis の構成と特徴を明らかにし、それに基づき Rim gyis の真偽性を考察することに主眼を置いたため、Rim gyis の内容に深く言及することが出来なかった。今後は、校訂テキストの作成と訳も含め、内容の更なる吟味が必要不可欠であろう。その点は今後の研究課題としたい。以上の考察を踏まえて Rim gyis について以下の三点に纏めることで結論としたい。

- (1) Rim gyis の前半部分は主に BhK II の止・観に関する記述部分からの逐語的な引用を中心にして成り立っている。BhK I や BhK III に BhK II よりも詳しい記述が存在する場合には、より詳しい記述の方を引用している。BhK の引用が中心となっている部分の後、頓門派からと思われる四種の反論を示し、その一つ一つに対して經典の引用を中心に論駁している。その最後の反論を論駁する際に引用される一連の經典群は SS の第 11 章に引用されるそれと一致する。このように、内容の多くを BhK や SS に依拠しているた

- め、*Rim gyis* に Vimalamitra の独自思想を見出すことは難しいものの、逆に *Rim gyis* は BhK の注釈書としての価値を有しているとも言える。
- (2) Vimalamitra の真作であると考えられる PHT に引用された一連の経典・論書の引用と同じものが、*Rim gyis* の Vimalamitra が自説を示していると思われる箇所に見出すことが出来ること。及び、そこに含まれる YŚ の二偈の引用される順番が Vimalamitra の *Rim gyis* と PHT 以前の論書に見出せず、彼独特のものと考えられること。この二点に基づき、Vimalamitra の真作である可能性が極めて高い。
- (3) *Cig car* に関しては、Vimalamitra の真作と考えられる *Rim gyis* と相反する内容であること、さらにはそのタイトルには問題が存在し、元々は *Cig car 'jug pa* を欠いた *rNam par mi rtog pa'i bsgom don* というタイトルであった可能性があることなどから、Vimalamitra の真作とは考え難い。

略号表

- BhK Kamalaśīla (ca.740–795). *Bhāvanākrama* I, II & III.
- BhK I Kamalaśīla (ca.740–795). *First Bhāvanākrama*. In Tucci 1958, Skt. Text: pp.187–229, Tib. Text: pp.229–282.
- BhK II Kamalaśīla (ca.740–795). *Second Bhāvanākrama*. In Goshima 1983.
- BhK III Kamalaśīla (ca.740–795). *Third Bhāvanākrama*. In Tucci 1971, Skt. Text: pp.1–33.
- Cig car Vimalamitra (ca.8–9c). *Cig car 'jug pa rnam par mi rtog pa'i bsgom don*. P. no. 5306. mDo 'grel (dBu ma) 7a4–15b1. 『西藏大蔵経』第 102 卷、15–18、鈴木学術財団、1965; D. no. 3910. ki 6b1–13b4.
- PHT Vimalamitra (ca.8–9c). *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i rgya cher bshad pa*. P. no. 5217. mDo 'grel (Sher phyin) 285b5–302b2. 『西藏大蔵経』第 94 卷、278–285、鈴木学術財団、1965; D. no. 3818. ma 267b1–280b7.
- PTMV Advayavajra (ca.10–11c)
- A *Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa*. In *Advayavajrasaṃgraha*. Ed. Śāstri. Baroda: M. H. Oriental Institute, 1927. pp. 23–27.
- B 「アドヴァヤヴァジュラ著作集——梵文テキスト、和訳 (1) ——」『大正大学総合佛教研究所年報』10、1988、pp.(46)–(57)
- Rim gyis Vimalamitra (ca.8–9c). *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don*. P. no. 5334. mDo 'grel (dBu ma) 397b6–419a8. 『西藏大蔵経』第 102 卷、171–180、鈴木学術財団、1965; D. no. 3938. ki 340b7–358a7.
- YŚ Nāgārjuna (ca.150–250). *Yuktiṣaṣṭikā*. In Lindtner 1982. pp.100–119.
- SPT Vimalamitra (ca.8–9c). *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa bdun brgya pa'i rgya cher 'grel pa*. P. no. 5214. mDo 'grel (Sher phyin) 9a1–105a5. 『西藏大蔵経』第 94 卷、167–206、鈴木学術財団、1965; D. no. 3814. ma 6b1–89a7.

- ŚS Śāntideva (ca.8c). *Śikṣāsamuccaya*. In Vaidya 1921; P. no. 5336. ki 3a8–225b3; D. no. 3940. khi 3a2–194b5.
- SSR Ratnākaraśānti (ca.10–11c). *Sūtrasamuccayabhāṣyaratnālokālaṃkāra*. P. no. 5331 mDo 'grel (dBu-ma) 253a5–388a3. 『西藏大蔵経』第102巻、113–167、鈴木学術財団、1965; D. no. ki 215a5–334a3.
- 『勸同目録』 『大谷大学図書館所蔵 西藏大蔵経 丹殊爾勘同目録』 (A *Comparative Analytical Catalogue of the Tanjur Division of the Tibetan Tripitaka*), Compiled by Otani University, Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Kyoto.

一次資料

Bu ston Rin chen grub (1290–1364)

- *bsTan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba*. (Catalogue of Zhwa lu bsTan 'gyur). In *The Collected Works of Bu-ston*. part 26 (la). (Śata-piṭaka Series Vol. 66). New Delhi: 1971. pp. 401–644.
- *bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzad*. In *The Collected Works of Bu-ston*. part 24 (ya). (Śata-piṭaka Series Vol. 64). New Delhi: 1971. pp. 633–1055.

sGra tshad pa Rin chen nam rgyal (1318–1388)

- *bsTan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu rin po che'i za ma tog*. In *The Collected Works of Bu-ston*. part 28 (sa). (Śata-piṭaka Series Vol. 68). New Delhi: 1971. pp. 343–574.

Pelliot tib. *Choix de Documents Tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale*, Tome I–II. Présentés par Ariane Macdonald et Yoshiro Imaeda. Bibliothèque Nationale, Paris, 1978–79.

参考文献

上山大峻

- 1974 「敦煌出土チベット文禅資料の研究——P. tib. 116 とその問題点——」『仏教文化研究所紀要』13。

沖本克己

- 1975 「bSam yas の宗論 (一) ——Pelliot 116 について——」『日本西藏学会々報』21、pp. 5–8。
- 1976 「bSam yas の宗論 (二) ——敦煌西藏文献に於ける諸禅師——」『日本西藏学会々報』22、pp. 4–7。

大八木隆祥

- 2001 「Vimalamitra 造 *Prajñāpāramitā-hṛdaya-ṭīkā* 和訳研究 (1)」『豊山教学大会紀

—Vimalamitra の *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don*—

- 要』29、pp. 1-23。
- 2002 「Vimalamitra 造『聖般若波羅蜜多心広疏』に見られる『大日経』『密教文化』208、pp. (21)-(39)。
- 金子英一
- 1990 「ヴィマラミトラの伝承」『宗教と文化』斉藤昭俊教授還暦記念論文集刊行会編、こびあん書房、pp. 421-436。
- 木村隆徳
- 1975 「敦煌出土チベット文写本 Pelliot.116 研究 (その一)」『印度学仏教学研究』23-2、pp. 778-781。
- 1976 「敦煌出土チベット文写本 Stein 709」『日本西藏学会々報』22、pp. 11-13。
- 1983 「Cig car 'jug pa と頓悟」『日本西藏学会々報』29、pp. 6-9。
- 林慶仁
- 1999 「Advayavajra と Sh'anti pa —— Ratnākaraśānti 二人説——」『日本西藏学会々報』44、pp. 3-13。
- 原田覚
- 1976 「bSam yas の宗論以後に於ける頓門派の論書」『日本西藏学会々報』22、pp. 8-10。
- 平松敏雄
- 1982 『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』(西藏仏教宗義研究 第3巻)、東洋文庫。
- 山口瑞鳳
- 1985 「『デンカルマ』八二四年成立説」『成田山仏教研究所紀要』9、pp. 1-61。
- 頼富本宏
- 1989 『チベットの密教』(岩波講座・東洋思想 第11巻)、岩波書店、pp. 289-321。
- Faber, F.
- 1985 "A Tibetan Dunhuang Treatise on Simultaneous Enlightenment: *The dMyigs su myed pa tshul gcig pa'i gzhung*." *Acta Orientalia*. Vol. 46, pp.47-77.
- 1989 "Vimalamitra – One or Two?." *Studies in Central & East Asian Religions*. Vol. 2, pp. 19-26.
- Gómez, L. O.
- 1983 "Indian Materials on the Doctrine of Sudden Enlightenment." In *Early Ch'an in China and Tibet*. Eds. L. Lancaster and W. Lai. (Berkeley Buddhist Series.5). Berkeley. pp. 393-434.
- Goshima, K.
- 1983 *The Tibetan Text of the Second Bhāvanākrama*. Kyoto.
- Karmay, S. G.
- 1988 *The Great Perfection (rDzogs chen), a Philosophical and Meditative Teaching of Tibetan Buddhism*. Leiden, Netherlands: E. J. Brill.
- Lalou, M.
- 1953 "Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-srong-lde bcan." *Journal Asiatique*.

Vol. CCLXI, pp. 313–353.

Lindtner, Chr.

- 1982 *Nagarjuniana, Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*. (Indiske Studier IV). Copenhagen: Akademisk Forlag. (reprint. Delhi: Motilal Banarsidass, 1987).

Tucci, G.

- 1958 *Minor Buddhist Texts, Part II: First Bhāvanākrama of Kamalaśīla*. (Serie Orientale Rome IX-2). Rome: Is.M.E.O.
- 1971 *Minor Buddhist Texts, Part III (Third Bhāvanākrama)*. (Serie Orientale Rome XLIII). Rome: Is.M.E.O.

Vaidya, P. L.

- 1961 *Śikṣāsamuccaya of Śāntideva*. (Buddhist Sanskrit Texts, No.11).

注

- (1) Vimalamitra の生涯については、その真偽のほどは定かではないものの、チベットにおける伝承を元に、先行研究において既に大筋で明らかにされている（平松 1982, 11–14, 33–38）、（頼富 1989, 296–97）。また、種々の文献に見出される Vimalamitra 伝を紹介し纏めたものとしては金子 [1990] が存在する。しかし同論文は伝承の紹介を主としており、それぞれの伝承の妥当性等を吟味し、Vimalamitra の伝記を確定するようなものではない。最近では、大八木氏によっても簡単に言及されている（大八木 2001）。ただし大八木氏がその注で述べているように、同氏の Vimalamitra 紹介は基本的には平松 [1982] に依拠していると思われる。この他、Karmay, S. G. 氏によっても数多くの言及がなされている（Karmay 1988, 20–63）。
- (2) *Rim gyis* と *Cig car* のタイトルは、論書の最初に記載された表記に従うものであり、厳密にはチベット語とサンスクリット語のタイトルを欠いている。それぞれサンスクリットタイトルは、*Kramapraśastikabhāvanārtha*, *Sakṛtpravesikanirvikalpabhāvanārtha* と還梵されている（『勘同目録』II-1, 107 & 98）。ただし両タイトルとも、デルゲ版では *artha* が *pada* と還梵されている。
- (3) この点に関する研究は数多く存在するが、代表的なものを挙げておこなうならば次の通りである。Demiéville (1958), Faber (1985), Gómez (1983), Tucci (1958), 上山 (1974), 沖本 (1975), (1976), 木村 (1975), 原田 (1976) など。
- (4) 一方、原田氏より以前にこの *Cig car* について言及をし、*Cig car* と Pelliot tib. no.116 の関係を知らない Tucci 氏は、後半部分を *Cig car* のオリジナルのものであると考えている（Tucci 1958, 115–21）。また、Faber 氏は *Cig car* 全体が Vimalamitra に帰せられた偽作であると考えているようである（Faber 1985, 49–50）。
- (5) このような箇所は *Rim gyis* 前半部分の全般にわたり存在し、全てを提示することは煩雑さを極めることから、本稿においてはその特徴のみを指摘するにとどめた。しかし、筆者は本稿執筆にあたり、*Rim gyis* の校訂テキストの作成と全訳を試みており、何れ BhK との関連も含め別の機会に発表したいと考えている。
- (6) [519] *Shes rab kyi pha rol du phyin pa bdun brgya pa'i 'grel pa / slob dpon Vimalamitras mdzad pa / 2.100 shl. / 7 bp. //* (Lalou 1953, 331) .
- (7) [529] *Shes rab snying po'i rgya cher 'grel pa / slob dpon Vimalamitras mdzad pa / 300 shl. / 1 bp. //* (Lalou 1953, 331)

- (8) 『Ihan dkar ma 目録』の成立年代については未だ確定しているとはいえないが、本稿においては山口瑞鳳氏の 824 年説を採用した (山口 1985)。
- (9) この妥当性は Vimalamitra 二人説の吟味を行い、密教論者と中観論者の二人の Vimalamitra が存在したという伝承を排除した Faber 氏によっても主張されている (Faber 1989)。
- (10) 引用されたこの二偈の配列と同様なものは Vimalamitra より後に活躍した Ratnākaraśānti の *Sūtrasamuccayabhāṣyaratnālokāṃkāra* (SSR) にも見出される。また Ratnākaraśānti と同年代の人物で彼と論争をしたことで知られている Advaya vajra の *Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa* (PTMV) の中にも Yṣ k°19 は引用されているが、下の表に挙げるように、この a 句は Yṣ の a 句とは異なり、Rim gyis、PHT、及び SSR に引用されているものと一致しているように思われる。この事実はどうのように理解されうべきであろうか。Yṣ には現存するものの他に別の写本が存在したと考えることが一番妥当であるようにも思われるが、Rim gyis や PHT と同様に Yṣ k°19 と k°12 を連続して引用する SSR における引用の仕方の類似については疑問が残る。Rim gyis や PHT が SSR に影響を与えたと考えるべきであろうか。SSR については、Ratnākaraśānti 二人説を考え、有名な Ratnākaraśānti とは同名異人の作であるという主張もあることから (林 1999)、その扱いには注意が必要であろう。Rim gyis と SSR の関係については現段階では調査が不十分であるが、本稿執筆に当たり調べた限りでは、Rim gyis に引用される経典のいくつかのものについては SSR にも見出されるなど共通点が多い、という印象がある。この点、さらに調査が必要であろう。(この Yṣ 第 19 偈 a 句に関する問題提起については、学会発表後、東京大学の斎藤明先生よりご教授頂いた)

Rim gyis (D. 348b7-349a2)	SSR (D. 289b1-2)
'phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas kyang / rten cing 'brel par gang 'byung ba // rang bzhin gyis ni de ma skyes // rang bzhin gyis ni gang ma skyes // de la skyes zhes ji skad bya // shin tu phra ba'i dngos la yang // gang gis shes par rnam brtags pa // rnam par mi mkhas de yis ni // rkyen las byung ba'i don ma mthong //	rten cing 'brel par gang 'byung ba // rang bzhin gyis ni de ma skyes // rang bzhin gyis ni ma skyes gang // de la skye zhes ci skad brjod // shin tu phra ba'i dngos rnam la // gang gi skye ba rnam brtags la // rnam par mi mkhas de yis ni // rkyen las byung ba'i don ma mthong //
Yṣ k°19 (108) & k°12 (106)	Yṣ k°19 (108)
de dang de brten gang byung de // rang gi dngos por skyes ma yin // rang gi dngos por gang ma skyes // de ni skyes zhes ji ltar bya // dngos po shin tu phra ba la'ang // gang gis sky bar rnam brtags pa // rnam par mi mkhas de yis ni // rkyen las byung ba'i don ma mthong //	tat tat prāpya yad utpannam notpannam tat svabhāvataḥ // svabhāvena yan notpannam utpannam nāma tat katham //
	PTMV (A,25-26; B,50)
	yat pratītyasamutpannam notpannam tat svabhāvataḥ / svabhāvena yan notpannam utpannam nāma tat katham //

これ以外にも、学会発表の際に資料で提示したように、Rim gyis の前半部における Vimalamitra 独自の箇所 (no. 9) に見出される三つの経典引用が PHT に見出されるのである。(no.9) (a) rNam par snang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa'i tantra las kyang / byang chub nam

mkha'i mtshan nyid de // rtog pa thams cad spangs (P. 400b6) pa yin // zhes gsungs so // yang gsungs pa / (b) gsang ba'i (D. 343a7) bdag po shin tu phra ba'i chos kyang yod pa ma yin zhing dmigs su med do // des na bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub (P. 400b7) ces bya'o zhes gsungs so // (c) de skad du Zla ba sgron ma'i ting nge 'dzin las kyang / bcom ldan 'das kyis byang chub kyi rang gi ngo bo bstan pa / shin tu phra (D. 343b1) ba'i chos kyang yod ma yin / shin tu phra zhes bya (P. 400b8) ba'ang yod ma yin // zhes gsungs so // don dam pa'i byang chub ni chos kyi sku yin no //

(a) PHT (D. 269b7, P. 288b7-8)

rNam par snang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa las kyang / byang chub nam mkha'i mtshan nyid pa // rtog pa thams cad spangs pa yin / zhes gsungs so //

(b) PHT (D. 276b2-3, P. 297a5-6)

rNam par snang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa las kyang / gsang ba'i bdag po de na shin tu phra ba'i chos kyang yod pa ma yin zhih dmigs su med de / de ni bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub ces bya'o zhes gsungs so //

(c) PHT (D. 276b2, P. 297a4-5)

de skad du Zla ba sgron ma'i ting nge 'dzin la sogs pa las / bcom ldan 'das kyis byang chub kyi rang gi ngo bo bstan pa / shin tu phra ba'i chos kyang yod ma yin // shin tu phra zhes bya ba'ang yod pa min // zhes bya ba la sogs pa dang /

- (11) Vimaxlamitra が *Rim gyis* を著作する可能性は状況証拠からも十分有り得る。即ち、既に指摘したように、*Rim gyis* は *Kamalaśīla* の *BhK* からの引用を多く含んでいる。この事実から、彼が *Kamalaśīla* の思想に影響を受けていたと思われる。実際 *Vimalamitra* の真作として既に挙げた *SPT* と *PHT* という二つの注釈書と同名の二つの注釈書を *Kamalaśīla* も著作しているのである。*SPT* に対応するものとしては、'*Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa bdun brgya pa'i rgya cher bshad pa* (P. no.5215, D. no.3814) が存在し、*PHT* に対応するものとしては、'*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po shes bya ba'i 'grel pa* (P. no.5221, D. no.3818) が存在する。
- (12) デルゲ版では、この箇所は以下に示すように「*Vimalamitra* による著作」という表現が欠けている。Mi rtog pa'i bsgom don bzhugs // Cig car 'jug pa rnam par mi rtog pa'i bsgom don /.
- (13) この事実は『勘同目録』II-1, 98 の注部分にも記載されている。また木村氏によって *cig car 'jug pa* という表現が必ずしも「頓悟」という漢訳に一致しないと指摘されている点も注意を要する(木村 1983, 6)。同氏によると *cig char ...tshor ba* や *cig car rig pa* などのチベット語が「頓悟」という漢訳に対応するという。ちなみに『勘同目録』に示される *cig car 'jug pa* に対応する漢訳は「頓入」であり(『勘同目録』II-1, 98)、大蔵経テンギュール目録の中国語版には「竟入」と記載されている(P. vol.151, 366.4)。何れも「頓悟」ではない。
- (14) 既に原田氏によって、*Cig car* と *BhK II* の目的の違いは示されているが(原田 1976, 8-9)、*Rim gyis* の論書の目的と併せ、三つを比較してみるなら、以下の通りである。

修習次第 (中篇) 3.14-16	それ故に、一切知者性を獲得することを欲する者は、慈悲と菩提心と方便という、これら三つについて学ぶべきである。(de lta bas na thams cad mkhyen pa nyid thob par 'dod pas snying rje dang / byang chub kyi sems dang / thabs dang gsum po 'di dag la bslab par bya'o //)
-------------------------	--

Rim gyis (D. 340b7- 341a1)	一切の障害を排除し、一切知者性を素早く獲得することを欲する者は、止と観を修習することと、菩提に心を生ぜしめることをなすべきである。(gang dag sgrib pa mtha' dag spang bar 'dod pa dang / thams cad mkhyen pa nyid myur du thob par 'dod pa des zhi gnas dang / lhag mthong bsgom pa dang / byang chub tu sems bskyed par 'bad par bya'o //)
Cig car (D. 6b2-3)	一切知者性を修習することを欲する者は、無分別禪定を修習すべきである。(gang dag thams cad mkhyen pa nyid myur du thob par 'dod pa des rnam par mi rtog pa'i ting nge 'dzin bsgom par bya'o //)

- (15) ここで挙げた Cig car の終末偈 a 句が mi rtog cig car 'jug pa となっているのは、同じく Rim gyis の終末偈に次のように書かれていることに似せられたためのもと思われる。

mi rtog rim gyis 'jug pa'i bsgom don 'di // byang chub don du gnyer ba'i gang zag gi //
don du bsam pa bzang po bskyed nas ni // yang dag don 'di bi ma mi tras byas //
de yi bsod nams bdag gis ci thob des // khams gsum sems can mtha' yas ji snyed kun //
shes rab mig thob dbu ma'i don rtogs nas // thams cad mkhyen pa myur du thob par shog //
 (Rim gyis, D.358a5-6)

さらにこの Rim gyis の終末偈の二偈のうち、下線を引いた部分が Cig car の終末偈と表現を基本的に同じくしている点も興味深い。また、この他にも、Cig car のタイトル Cig car 'jug pa rnam par mi rtog pa'i bsgom don が、本来 rNam par mi rtog pa la cig car 'jug pa'i bsgom don でなければならないことを示す例が、まさに先行研究で問題とされた Pelliot tib. no.116 の中に見出されるのである。即ち、Pelliot tib. no.116 で引用される『無所得一法論』には「不観の義に頓入するこれは最勝の涅槃道である」(rnam par myi rtog pa'i don (org. mdo) // cig car 'jug pa 'di ni // mya ngan las 'das pa'i lam gyi mchog yin par) (Pelliot tib. no.116, folio 168.3-4) という表現が存在するのである。木村 (1983, 8) 参照。このように Cig car 'jug pa という表現が rnam par mi rtog pa の前に付けられた理由として、Cig car が漢訳からチベット語訳された論書であるという可能性も考える。即ち、あくまでも仮定の話であるが、Cig car 'jug pa rnam par mi rtog pa であれ、rNam par mi rtog par cig car 'jug pa であれ、漢訳は「頓悟無分別」となると想定され、この漢訳の語順のままチベット語に置き換えるならば、Cig car 'jug pa が rnam par mi rtog の直前に置かれる x

- (16) 1. (582.7) gCig car 'jug pa rnam par mi rtog pa'i bsgom don paṇḍita Bi ma la mitras mdzad pa / paṇḍita Dharma ta shī la dang / lo tsā ba bandhe Ye shes sde'i 'gyur /; (585.12) Rim gyis 'jug pa'i bsgom don slob dpon Bi ma la mi tras mdzad pa / paṇḍita Pradznā wa rma dang / lo tsā ba Ye shes sde'i 'gyur rnam bzhugs so // In *bsTan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba*. (一次資料参照)
2. (516.3-4) gCig car 'jug pa rnam par mi rtog pa'i bsgom don paṇḍita Bi ma la mitras mdzad pa / paṇḍita Dharma ta shī la dang / lo tsā ba bandhe Ye shes sde'i 'gyur /; (518.4) Rim gyis 'jug pa'i bsgom don slob dpon Bi ma la mi tras mdzad pa / paṇḍita Pradznā warmma dang / lo tsā ba Ye shes sde'i 'gyur rnam bzhugs so // In *bsTan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu rin po che'i za ma tog*. (一次資料参照)

* 本稿最終校正の切間際に、昨年末中国で出版された 'Phang thang ma 目録 (*dKar chag 'phang thang ma; sGra sbyor bam po gnyis pa*. 『旁塘目録；声明要領二卷』 (Bod ljongs rten rdzas bshams mdzod khang gi rtsa che'i dpe rnying gces sgrig dpe tshogs. 西藏博物館古籍珍本叢書 1) 北京：民族出版社、2003) を参照する機会を得たが、そこにもこの Rim gyi と Cig car の名前を見つけることはできなかった。